

American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第4回

アウトローの切ない人生を
見事に表現したデュエット

Merle Haggard & Willie Nelson
'Pancho And Lefty'



"Merle Haggard & Willie Nelson"
Epic © FE37958 [1983]
Legacy/Epic © EK 89258

タウンズ・ヴァン・ザント』に入っていたことがわかった。
ちなみにこのアルバムタイトルを直訳すると、亡くなったけど、すごかったタウンズ・ヴァン・ザント。とはいえ、彼のオリジナル版も、エミルー・ハリスのヴァージョンも、ウイリー・ネルソンとマーレ・ハガードのデュエットにはかなわない。きつと人生を経験した、大人の声とパフォーマンスの深さなのだろう。三つのヴァージョンは少しずつ歌詞が違うが、今回はウイリー&マーレのヴァージョンで紹介しよう。

これはパンチョとレフティという、ふたりのアウトローを歌った曲だ。とはいえば話をそれだけでは終わらない。アウトローとは "outside of the law"、つまり法律の外で生きている犯罪者のこと。そんな彼らの友情、また彼らを抑えようとする人たちの感情なども表わされている。そしてウイリーとマーレが歌うことが、ふたりのアウトローを投影しているのだろう。キャラクターの絆さえ感じられる仕上がりだ。
アメリカ人はアウトローをロマンチックに感じているものだ。決してアウトローを

初めてこの 'Pancho And Lefty' (原題は 'Pancho...') を聴いたのは、77年に発売されたエミルー・ハリスのアルバム『ラクジュリー・ライナー (真珠の舟)』に入っていたヴァージョンだった。その時は作詞をしたテキサスのソングライター、タウンズ・ヴァン・ザントのことは何も知らず、アルバムを買ったのにも関わらず、あまり聴いていなかった。しかし83年にウイリー

・ネルソンとマーレ・ハガードのデュエット・ヴァージョンがカントリー・チャートの1位になった時は、すごく深みのある曲だと感じた。そして自分のアルバム・コレクションから探し出した。自分でアルバムを買っていたことを忘れていたぐらいだった。改めて聞き直し、調べてみると、この曲はタウンズ・ヴァン・ザントが72年にリリースしたアルバム『ザ・レイト・グレイト・

悪く思っているわけではない。正義の味方で、人助けをしたり、金持ちから金を盗んで困っている人たちに配ったりする……そんなイメージだ。アウトローをテーマにした映画もたくさんある。『ビリー・ザ・キッド』『明日に向かって撃て』『そして『ボニーとクライド』もそうだ。アウトローがいれば、彼らを抑えようとする人もいる。両方がいるからストーリーになるんだ。

Living on the road my friend
Was gonna keep you free and clean
Now you wear your skin like iron
And your breaths as hard as kerosene
You weren't your mama's only boy
But her favorite one it seems
She began to cry when you said good-
bye
And sank into your dreams

最初のヴァースでは、シンガーが友人のパンチョに話しているような展開だ。マイ・フレンドってね。
君は 'Living on the road'、これは道路の上で暮らしていることを意味して、旅をし

ながら生きているということ。そうすれば自由に、クリーンに生きていけると思っていたのだろう。肌を鉄みたいに着ているというのは、自分が傷つかないようにプロテクトしていること。息も灯油みたいに不健康な感じがするというのは、きつと疲れきって、息をするのも辛いからだろう。その上、アウトローとして生きているとしゃべる言葉も固くなるのかもしれない。友人として、彼はいう。お母さんにはほかの子供たちもいたけど、君が一番好かれていた。それなのに、なぜおまえは出て行ったんだ。おまえが将来の夢を追って別れを告げるとお母さんは泣き始めた。友人はまるで、死んだパンチョの墓の前で説教しているようだ。とはいっても、歌全体からは、母親のそばを離れて強く生きて行く、とするパンチョの気持ちが漂っている。この音を作ったプロデューサーは、すごいと僕は思う。

Pancho was a bandit boys
His horse was fast as polished steel
Wore his gun outside his pants
For all the honest world to feel
Pancho met his match you know

On the deserts down in Mexico
And nobody heard his dying words
Ah, But that's the way it goes

セカンド・ヴァースからは、you (君) が he (あいつ) になり、パンチョのことを人に教えているようなニュアンスだ。ここで音楽のムードも変わる。まるでパンチョを自慢しているかのように、プライドを持って歌っている感じがさえる。

パンチョは無法者だった。そして彼の馬は磨いた鉄ほど速かったとある。polished steel、磨いた鉄とは鉄道の線路のことだ。つまり、彼が乗っていた馬は、汽車みたいに速かったという。社会で正しく生きている人たちがパンチョをアウトローだと感じるように、あえて拳銃をズボンの外につけていた。彼はアウトローかもしれないが、そこで拳銃を隠すことはせず、みんなが彼の力と拳銃の存在や意味、生き方を感じられるように振る舞った。

次の行の 'match' は、自分より強いものに出会ってしまったということ。例えば、俺はあの女には負ける、そんなときは 'I met my match' という。西部のアウトロー



ーにはよくあるように、パンチョもメキシコへ行く。アメリカの法律から逃げるにはメキシコしかないからね。そこでパンチョは勝てない相手に出会ってしまおう。つまり殺されたんだ。彼の最後の言葉は誰も聞けなかった。そこには誰も友だちがいなかったというわけだ。そして次の一行が切ないそんなものだ、と半ば諦めている。

(Chorus)

All the Federales say

They could have had him any day

They only let him hang around

Out of kindness I suppose

メキシコの連邦警察の連中は、言っている。いつでも彼は捕まえられた。それなのに捕まえなかったのは、きつと優しさからだろうと話し手は言う。

この1回目のサビのところには、冒頭で触れた三つのヴァージョンの中で、彼らだけが使っている言葉がある。それは、him hang around。ハング・アラウンド (hang) を使ったのは、首吊りのハングにかかったのだとウィリー本人が話している。ほか

のヴァージョンでは、'slip away' という言葉を使っているが、これは逃がすということ。滑るからきているんだ。

アウトローも、彼を捕まえようとする警察も、同じコインの両面だ。長年追っかけているから、互いにリスベクトがある。それに捕まえてしまったら、自分たちの意味や役目がなくなってしまうからね。

Lefty he can't sing the blues

All night long like he used to

The dust that Pancho bit down south

Ended up in Lefty's mouth

The day they laid poor Pancho low

Lefty split for Ohio

Where he got the bread to go

There ain't nobody knows

今度はパンチョの相棒、レフティーの話だ。彼は昔みたいに朝までブルースを歌えない。レフティーはもう歳を取っていて、重い罪を背負っているんだ。'The dust that Pancho bit down south. Ended up in Lefty's mouth.'。パンチョが南で口にした埃が、レフティーの口に入った。この英

語の意味は深く、なかなかわかりづらいだろう。'He bit the dust' というのは、彼は死んだということ。パンチョを殺したのはレフティーだ。彼がパンチョを裏切った。パンチョを低く寝かした、次にお墓に埋めたんだ。そしてその日にレフティーはオハイオ州に逃げてしまおう。英語では、行くためのパンをどこで手に入れたのかとあるが、英語で 'bread' とはお金のことも意味する。レフティーはパンチョを裏切って殺し、誰かに報復金をもらったんだ。

(Chorus)

All the Federales say

They could have had him any day

They only let him slip away

Out of kindness I suppose

このサビはオリジナルと同じで、パンチョを逃がしたとある。'slip away' という言葉を使って表現している。

The poets tell how Pancho fell

Lefty's livin' in a cheap hotel

The desert's quiet and Cleveland's cold

So the story ends we're told
 Pancho needs your prayers it's true,
 But save a few for Lefty too
 He only did what he had to do
 Now he's growing old

時代が流れている。詩人たちがパンチョが倒れたことをみんなに伝えている。その一方でレフティーは安いホテルで暮らしている。かつてふたりがいた砂漠は静かで、レフティーが住むオハイオ州の街、クリーヴランドは寒い。ここは冬が寒くて有名な街。詩人たちが伝えていく。パンチョとレフティーの話は、終わらない。パンチョには祈りが必要だが、レフティーのことも忘れてはいけない。少しでもいいから、レフティーにも祈りをあげてくれ。彼はやらなきゃいけないことをしただけなんだよと。

このヴァージョンの最後の一行は、マールの息が切れた感じの、言葉にならないような歌声だ。レフティーはすでに歳を取り、人生にくたびれた様子を全体に漂わせている。

(Chorus)

All the Federales say

They could have had him any day
 They only let him go so long
 Out of kindness I suppose
 A few grey Federales say
 They could have had him any day
 They only let him go so long
 Out of kindness I suppose

ここでコーラスを2回リピートする。'A few grey Federales say' という言葉が、なんと切ない。'grey' という言葉を使い、警察も歳をとり白髪になっている、もうパンチョとレフティーを追いかける人たちがふたりと同じように歳を取っているんだと警察もふたりを追っているときに、人生の花だったというわけだ。最後に、こんな長く捕まえなかったのは優しさだと。

人生の寂しさや切なさを歌った曲だ。お互いへのリスベクトも感じさせる。彼らのそんな生き方を僕は格好いいと思う。そして歌い手、プロデューサー、ソングライターと、すべての人の力がひとつになって、この曲はすばらしく奥深い仕上がりになったのだと思う。